

近衛団長の魔石に痴態を録られ、毎晩寸止めで犯される王宮使用人の隷属カルテ
タビューへ

体
験
版

目次

第一話 屋上の取引 3

第二話 検分という名の騷

32

第一話

屋上の取引

サインも契約もない。それでも俺の夜は、近衛騎士団長のものになった。

夜明け前の王宮は死んだように静かだった。回廊の灯りは半分落ちている。衛兵の足音も遠い。

俺の心臓だけが、うるさかった。

名前は焰。半月前に下働きとして入った、ただの新入り使用人。表向きは。

本当の狙いは別にある。兄をはめた男の証拠を、この王宮から盗み出す。それだけのために、俺はここにいた。

半月かけて、監視の目の死角も衛兵の交代も頭に入れた。今夜が初めての勝負だ。

手にはろうそく立てが一本。見回りで拾ったでも言い訳できる。

本来なら、こんな小細工はしない。見つければ殴り倒して逃げる。それが俺のやり方だった。

だが今夜は殴れない。逃げれば、兄の名前は二度と戻らない。

あと10分で巡回が来る。それまでに執務区画の記録板から証拠を抜く。

兄を潰したのは巖。王の名代として実務を握り、邪魔者を事故で静かに消す男だ。兄はその不正に気づいた。たったそれだけで、半年前、無実の罪を着せられた。

ろうそく立てが冷たい。俺はその冷たさへ意識を逃がした。手は震えていない。兄のためだ。ここで折れるわけにはいかない。

執務区画の鍵を指先でなぞると、音もなく開いた。

目当ての記録板は机の上。あと数歩――。

背後で空気が動いた。

振り向く前に腕を取られ、壁へ叩きつけられる。ほほが冷たい石に押し付けられた。

「不法侵入。規律違反だ」

低い声だった。温度がない。

近衛騎士団長の冴。寡黙な男だ。王室警護の実務を統べる若き団長で、表向きは巖の指揮下で忠実に動く。半月のあいだ、俺はこの男を巖の番犬としか見てこなかった。最大の障害だ。

その番犬が今、俺の腕をねじり上げている。

「離せ」

にらみ返した。だが体が言うことを聞かない。恐怖と緊張で、腹の奥がなぜか熱かった。押し付けられたものの間で、布の下の俺のものが反応している。最悪だ。よりによって今。

冴の目が、そこへ落ちた。

冴の手の中で、小さな石が淡く光った。低い反響が、一度、空気を震わせる。近衛が証拠保全に使う、記録石だ。目の前の場面を、そのまま幻影に写し取る魔道具。

「……何を、写した」

「侵入の証拠。それと、これを」

記録石の表面に、俺の姿が浮かんでいた。壁に押さえつけられ、布を押し上げた、無様な俺が。淡い幻影が、ゆらりと揺れている。

「規定では、即刻、上へ報告する」

冴はそう言った。だが報告しなかった。記録石を下ろし、俺を見据えたまま続ける。

「黙っていてほしいなら、毎晩、屋上へ来い」

毎晩、屋上へ来い。意味が分からなかった。

普通なら侵入者はその場で巖へ突き出す。手柄になるからだ。なのにこの男はそれをしない。幻影を写し取って、自分の手元に俺を縛ろうとしている。

頭の隅で警鐘が鳴った。この取引には裏がある。

だが見抜く前に、俺は答えを出さなきゃならない。今、この場で。

殴って逃げる。一瞬そう考えた。気絶させて消えるのは簡単だ。だができない。俺が消えれば潜入は終わり、兄の証拠は永遠に手に入らない。

俺は握った拳を、ほどいた。

「……わかった」

奥歯をかんで、そう言った。

屋上へ続く階段は塔の奥にある。狭くて暗い。

俺は冴の後ろを一段ずつ上った。逃げ場が足元から消えていく。

屋上に出ると、夜明け前の風が顔を打った。手すり。給水塔。隅で篝火がひとつ消えかけている。月明かりも雲に隠れていた。

ここは死角だ。冴が選んだのは、誰の目も届かない場所だった。

「脱げ」

冴が短く言った。命令だ。

俺は動かず、にらみ返した。

「規定だ。検分する」

「……検分？　笑わせんな。騎士団長サマが、こんな夜中に使用人の体をいじくり回すのが、ご立派なお勤めか」

吐き捨てた。だがここで逆らえば、あの幻影が上へ回る。兄の証拠が遠のく。俺は上着に手をかけ、一枚ずつ脱いでいった。シャツのボタンを外す指が、屈辱で冷たい。

さらした肌を、夜風が伝う。鳥肌が立った。

冴の視線が、俺の体をなぞる。値踏みする目だ。脅威の度合いを測る、警備の男の目。情も欲も、表に出さない。肩、胸、腹、脚。持ち物を点検するように、上から下まで検める。

「肩に古い傷。利き腕は右。脚の鍛え方は、ただの下働きじゃない」

冴は読み上げた。俺の体を、数えるみたいに。

「使用人にも腕っぷしは要る」

「そういうことにしておく」

冴は表情を変えない。俺の素性を半分は見抜いている。そう感じた。なのに、上へ突き出す素振りはなかった。今はそれどころじゃない。

「両手を手すりに」

冷たい鉄をつかんだ。夜露で湿っている。背後に冴が立ち、布越しに体温が伝わってきた。

大きな手が、胸へ回る。

指先が胸の先をかすめただけで、体が勝手に跳ねた。

「……ここか」

弱点を、たった今見つけた声だ。

指がそこをつまんで転がし、押し潰し、爪の先で弾く。腹の奥に熱が走って、下半身が勝手に張り詰めていく。やめろ。な
んで反応してる。胸なんかで。

「触んな」

かみついた。だが声がかすれていた。

冴の指は急がなかった。焦らすように、同じ場所を責める。つまんでは離し、転がしては押し潰す。そのたびに腰が勝手に揺れて、胸の先が固くどがつていくのが、自分でも分かった。こんな場所が弱いなんて、今夜まで知らなかった。知りたくもなかった。

俺のものは、もう完全に頭をもたげていた。布の下で痛いほど張り詰めて、先からぬれている。

背後で冴の腰が触れた。布越しに、硬いものが当たる。雄の熱と、質量。綱みたいに張り詰めたそれが、俺の尻へ押し付けられた。この男も兆していた。

俺は肩越しに振り返り、せせら笑ってやった。

「へえ。騎士団長サマのおちんちんも、ちゃんと反応してんじやねえか」

わざと、子供の呼び方を選んだ。この男のプライドを、小さく削るために。

「検分の役得か？　しょぼいもんだな。思ったより、可愛い」
強がりだった。口で矮小化して、冷たい顔の奥をえぐってやりたかった。だが俺の声は震えている。尻に当たる雄は、台詞とは裏腹に、確かに俺をのみ込もうとしていた。その差を、俺自身がいちばん知っている。

冴は答えなかった。表情も変えない。

代わりに俺のズボンへ手をかけ、下着ごと引き下ろした。

俺のものが、夜明け前の外気にさらされる。先から透明な糸が、つうと垂れた。

冴の手が、それを握る。

熱くて、大きい手だ。剣を握る、硬い手のひら。根元から先まで一度ゆっくり扱かれて、腰が跳ねた。

「先走りが出てる」

冴は事実だけを口にする。

「侵入のときから、ずっところだった。記録に残っている」

「黙れ……っ。いちいち言うな」

手の動きが速くなる。ぬれた音が立った。

くちゅ、くちゅ、と。自分のこぼした先走りが、冴の手と俺のものの中で音を立てる。その音が、屋上の静けさにやけに大きく響いた。

冴の親指が、先のくぼみをぐりつとなぞる。

「っ、あ……っ」

声が漏れた。みっともない。くちびるをかでこらえる。

冴は俺の反応をすべて見ていた。どこを触れば俺がどう跳ねるか、一晩で読み取っていく。胸の先をもう片方の手でつまみながら、前を扱う。二か所を同時に責められて、腰の動きが止まらなくなった。

「あ、あ……っ、く、そっ」

限界がすぐに来た。腰の奥がせり上がる。出る。

だがそのとき、冴の指が根元をきつく締めた。

出口を、塞がれる。

「あ……っ、なんで」

「まだ早い。もう少し見ておく」

「ふざ、けんな……っ。中途半端は、きついんだよ……っ」

寸止めだ。行き場をなくした熱が、体の中で渦を巻く。締め付けられたものが、痛いほど脈打った。先走りが止まらず、根元を握る冴の指を伝って垂れる。

屈辱だった。だがその屈辱の真ん中で、俺の体は、もっと、と叫んでいた。信じられなかった。

俺は震える声で、それでも笑ってやった。

「お前さ……っ、これが、騎士の、することかよ。番犬が、芸でも、仕込むみたい……っ」

「黙れ。集中が乱れる」

冴の声が、一段、低くなった。気のせいかもしれない。

冴は俺を焦らし続けた。達しそうになるたびに根元を締め、出させない。出口の手前で何度もせき止められて、俺の体は熱だけを抱え込んでいった。涙がにじむ。出したいのに出せ

ない。腰が、自分の意志を離れて、冴の手へこすりつけようとならぬ。前後に揺れる。情けない。だが止まらない。

「……たのむ、なんて、言わねえからな」

俺は意地を張った。屈服はしない。体がどれだけのまれても、口だけは折らない。それが俺の、最後の一線だった。折れたら、兄のところまで届かない。

冴はしばらく俺を見ていた。その視線が、いつもより少し長かった。

やがて冴の手が、根元から緩んだ。

「いい。出せ」

許しが下りた瞬間、俺は弾けた。

白濁が、屋上の床へ飛ぶ。一度、二度、三度。果てるたびに俺のものがびくびくと脈打つ。腰から力が抜けた。

冴が記録石をかざす。

石が淡く光り、低く震えた。

「——記録した」

俺の果てたばかりの体も、床を汚した証拠も、全部、石の中の幻影に収められた。

屈辱で頭が熱くなる。だがその熱の底で、俺の体はまだじんとしびれていた。写し取られた。それだけで、腹の奥がまた熱を持つ。

なんで俺は、これで満たされてる。

冴は背を向けて、屋上の出口へ歩き出した。

今夜、この男は俺を屈辱の底まで突き落とした。だが一度も、本気で壊そうとはしなかった。寸止めを繰り返したのも、最後はちゃんと出させたのも、加減を知っているみたいだった。ただ痛めつけたいだけなら、こんな丁寧さは要らないはずだ。

報告しない。証拠を捨てない。誰の目も届かない場所を選ぶ。

点と点が、まだ線にならない。だが確かに、何かがある。

兄の顔が浮かんだ。最後の面会で、もう何も期待していない目をしていた、あの顔が。だから俺が動く。こんな屈辱の中でも、目だけは閉じない。この男の正体も巖の不正も、俺が全部、見届けてやる。

「明日も来い」

扉の向こうへ、冴の声が消えた。

俺は一人、屋上に残された。

手の中にはもう何もない。さっきまでの締め付けの感触だけが、まだ残っている。

報告しない男。筋の通らないことばかりする、この男の。その筋の通らなさの正体を、俺は必ず暴いてやる。

第二話

検分という名の騷

翌朝、俺はいつも通り使用人として働いた。

廊下を磨き、ろうそく立てを並べ直し、洗い物を運ぶ。何食わぬ顔で。だが頭の中では、ずっと昨夜のことを考えていた。

俺は執務区画へ侵入して、現場を冴に押さえられた。普通なら今ごろ、俺は捕らえられて王宮を追い出されている。

なのに、何も起きていない。

朝の点呼でも、俺の名は普通に呼ばれた。上役からの呼び出しもない。誰も俺を疑っていない。昨夜の侵入など、なかった

みたいに。

つまり冴は、報告していない。

俺を脅して屋上へ呼んだくせに、上へは何も上げていない。

決定的な証拠を握りながら、それを使っていない。

なぜだ。

番犬なら、侵入者を主人へ突き出すのが筋だ。手柄にもなる。なのにこの男は、その手柄を捨ててまで、俺を自分の手元に置いている。

裏がある。直感がそう告げていた。だがその裏が何なのかは、まだ見えない。

俺は雑巾を絞りながら、頭の隅で計算を続けた。冴の狙いを読めれば、それが俺の武器になる。脅されているのは俺だ。だが相手の狙いさえつかめば、立場は変えられる。

午後、妙なことがあった。

別の騎士が、新入りの使用人の身元を確かめたいと言い出したらしい。俺のことだ。だがその話は、いつのまにか立ち消え

になった。聞けば、冴団長が「この区画は自分が見る」と引き取ったという。

偶然か。それとも、何かの意図か。

俺の身边に誰かが近づくとたび、冴がそれを遮っている気がした。守られている——わけじゃない。監視のために、他人を寄せつけないだけだ。そう思おうとした。だが、その理屈にも無理があった。

回廊の先に、冴がいた。近衛騎士団長が、下働きの区画に用などないはずだ。なのにいる。俺を見ている。

目が合った。冴は何も言わず、立ち去った。

監視されていると、はっきり分かった。報告はしない。だが放しもしない。この男のやることは、何ひとつ筋が通らなかった。

その夜も、俺は屋上へ向かった。

行かなければ、あの幻影が表に出る。選択肢はない。狭い階段を上るたび、屈辱が足元から積み上がっていく。

屋上に出ると、冴はもう待っていた。手すりにもたれ、夜の街を見下ろしている。俺が来ると、ゆっくり振り返った。

「来たな」

「来なきゃ、お前があれをばらまくんだろ。来るしかねえだろうが」

俺は吐き捨てた。

「で、今夜は何だ。また検分とかいう、ご立派なお勤めか」

冴は答えず、懷から何かを取り出した。

細口の、ガラス瓶だった。

月明かりに、透き通って光る。

「……ガラス瓶？」

意味が分からず、俺は眉をひそめた。

「何のつもりだ」

「規律違反者の矯正だ」

冴は瓶を手の中で軽く回した。透明な、ただの小瓶。だが飲み口がやけに、小さく見えた。

「だがその前に、検分だ。両手を手すりに」

また検分か。俺は奥歯をかんだ。だが逆らえば、あれが出る。冷たい鉄をつかんだ。背後に冴が立つ。

大きな手が、上着の中へ滑り込んできた。

「っ……」

冷たい指が、いきなり胸の先に触れる。昨夜の弱点を、この男は正確に覚えていた。

「昨夜より、立ち上がりが早いな」

冴は事実を読み上げる。指で胸の先をつまみ、転がし、押し潰す。そのたびに俺の腰が跳ねた。

数回いじられただけで、布の下の俺のものが、もう兆していた。情けないほど早い。昨夜、この体は弱点を覚え込まされたのだ。一晩で。

「触んな……っ。検分なら、もう済んだだろ」

「経過観察も検分のうちだ」

冴の手がズボンと下着を下ろした。夜風が下半身をなでる。

さらされた俺のものは、もう半分以上、頭をもたげていた。先がてらりと光っている。

冴はそれには触れず、代わりに、さっきのガラス瓶を俺に握らせた。

「自分で立たせて、この口へ入れろ」

正気か。俺は瓶の細い飲み口を見た。こんな小さな穴に、入れるというのか。

「ふざけんな。誰がそんな——」

「やらないなら、これを上へ回す。今すぐ」

冴はもう片方の手に、記録石を握っていた。淡い光が、その手の中でくすぶっている。脅迫だ。いつもの手だ。

俺はくちびるをかんた。屈辱で頭が熱くなる。だが、やるしかなかった。ここで折れれば、潜入も兄の証拠も、全部終わ

る。

俺は自分のものへ手を伸ばした。敵の目の前で。見られながら自分で扱う。最悪の状況だ。

なのに。

手を動かすうちに、俺のものはすぐに完全に張り詰めた。さつき胸を責められた熱が、まだ残っている。見られているという感覚が、また腹の奥に火を点けた。

くそ。なんでだ。なんでこんな状況で、こんなに固くなる。

先が、もうぬれている。

「入れる」

冴が促す。

俺は瓶の飲み口を、自分の先へあてがった。冷たいガラスの縁が、いちばん敏感な部分に触れて、背筋がぞくりとした。

ゆっくり、押し込む。

飲み口は狭かった。張り詰めた先が、無理やりガラスの口を押し広げて、中へ入っていく。きつい。ぎちぎちと、ガラスの

縁が締めつける。だがその圧迫感が、なぜか、たまらなかった。

「あ……っ」

声が漏れた。半分ほど入れたところで、瓶が俺のものを締めつけ、固定する。引いても、簡単には抜けない。

「抜けないだろう」

冴は事実を読み上げる。

「形が合っている。出してなえさせろ。それしか、抜く方法はない」

「……っ、これがお前の躰か。趣味、悪いな、騎士団長サマ」

俺は笑ってやろうとした。だがガラスに締めつけられたものは、痛いほど張り詰めて、先走りをこぼし続けている。透明な瓶の内側を、俺のこぼしたものが、つうと伝い落ちた。台詞だけが、虚しく宙に浮く。

俺は腰を動かした。ガラス瓶の中で、自分のものをこする。

なめらかな内側が、先をぬるぬると刺激する。妙な感触だ。だが、効いた。腰の奥が、じんとしびれてくる。

透明なガラス越しに、俺のものが見えていた。締めつけられて張り詰めた雄が、瓶の中で脈打っている。こぼした先走りが、ガラスの内側を白く曇らせていく。逃げ場がない。自分の高ぶりが、透けて、全部見えている。

「いい眺めだ」

冴が言った。温度のない声で、俺のいちばん見られたくない姿を眺めている。

「ガラス瓶で腰を振る使用人か。検分のしがいがある」

「黙れ……っ。見てんじゃ、ねえ」

だが、見られていると思うほど、俺のものはガラスの中で固くなった。最悪の体質だ。昨夜気づきたくなかった事実が、また突きつけられる。俺は、見られると、高ぶる。

冴の手が、また胸の先をつまんだ。

「っ、また、そこ……っ」

胸と、ガラスの締めつけと。前と後ろから攻められて、腰の動きが止まらなくなる。

「お前は今、何をしている」

冴が、不意に問うた。

「……は？」

「自分が何をしているか、口で言え。言わないなら、ここで止める。中途半端のまま、朝までな」

冴の手が、瓶の底に添えられた。出口を、塞ぐように。

屈辱だった。言わせる気か。自分の口で。だが、ここで止められたら、この生殺しが続く。

「……っ、瓶に、入れて、こすってる」

俺は奥歯をかんで、絞り出した。

「何を、だ」

「……っ、俺の、を」

「名前を、言え」

冴の声は、温度がないままだった。それが、よけいに俺を追
い詰める。

ちくしょう。こいつ。

「……俺の、おちんちんを、瓶に、突っ込んで、振ってる……
っ。これでいいか、クソ団長」

言い終えて、屈辱で目の奥が熱くなった。だが、言わされた
羞恥が、なぜか、腹の奥の熱をさらに煽った。自分の口にした
途端、俺のものがガラスの中でびくんと跳ねる。

最悪だ。言わされて、興奮してる。

限界が、すぐに来た。腰の奥がせり上がる。出る。

だがそのとき、冴の手が瓶の底を押さえた。俺の動きが、封じられる。

「あ……っ、なんで」

「まだだ。もう少し、見ておく」

「ふざ、けんな……っ。出させろ……っ」

寸止めだ。出口まで来た熱が、行き場をなくして、体の中で渦を巻く。ガラスに締めつけられたものが、痛いほど脈打った。こぼれ続けた先走りが、透明な瓶の底に、たまっている。

冴は俺を焦らし続けた。瓶の底に手をあてたまま、俺が達しそうになるたびに、動きを封じる。出口の手前で何度もせき止められて、俺の体は、熱だけを抱え込んでいった。

涙がにじむ。出したいのに出せない。腰が、自分の意志を離れて、押さえられた瓶へ、自分からこすりつけようとしている。

る。意地と体が、完全に裂けていた。

瓶の底には、こぼれた先走りが、うつすらとたまり始めていた。透明なガラスの底に、俺の高ぶりの証拠が、見えている。その光景が、よけいに俺を追い詰めた。

「……たのむ、なんて、言わねえからな」

俺は震える声で、意地を張った。屈服はしない。体がどれだけのまれても、口だけは折らない。行為は言わされた。だが、命乞いは、しない。それが俺の、最後の一線だった。

冴はしばらく、俺を見ていた。何か言いたげに。いや、何も言わずに。その視線が、いつもより少しだけ、長かった。

やがて、冴の手が、瓶の底から離れた。

「いい。出せ」

許しが下りた瞬間、俺は弾けた。

ガラス瓶の中へ、思いきり放つ。白濁が、透明なガラスの内側を汚していく。一度、二度、三度。自分の出したもので、瓶

が濁った。果てるたびに、俺のものが瓶の中でびくびくと脈打つ。腰から、力が抜けた。

最悪に、みじめな射精だった。敵の目の前で、ガラス瓶の中へ、自分の手で。

張り詰めが収まると、瓶はようやく緩んだ。俺はそれを引き抜いた。先がぬるりと抜ける感覚に、また腰が震える。

冴が記録石をかざす。

石が淡く光り、低く震えた。

「――記録した」

俺の精で濁った瓶も、それを握る俺の手も、果てたばかりの体も、全部、石の中の幻影に収められた。

屈辱で頭が真っ白になる。だがその白さの底で、俺の体は、まだじんと熱を残していた。写し取られた。また、記録された。それだけで、腹の奥が熱を持つ。

なんで俺は、これで満たされてる。

冴は、濁った瓶を俺の手から取り上げた。そして、無造作に懷へしまった。

「……おい。それ、どうする気だ」

「証拠の保管も、職務のうちだ」

冴はそれだけ言った。

俺の出したもので濁ったガラス瓶が、この男の懷の中にある。その事実が、妙に生々しかった。

今夜もこの男は、俺を屈辱の底まで突き落とした。だが一度も、本気で壊そうとはしなかった。寸止めを繰り返したのも、最後はちゃんと出させたのも、加減を知っているみたいだった。

報告しない。証拠を捨てない。他人を俺に近づけない。そして、決して度を越さない。

点と点が、まだ線にならない。だが確かに、何かがある。この冷たい男の奥に、俺の知らない事情が、隠れている気がし

た。

兄の顔がよぎった。あの人は最後まで、誰も責めなかった。無実の罪を着せられても、ただ静かに、お前は巻き込まれるな、と言っただけだ。あの諦めた目を、俺は忘れられない。

だから、俺が代わりに動く。たとえこんな屈辱の中でも、目だけは閉じない。

冴は背を向け、屋上の出口へ歩き出した。

「明日も来い」

それだけ言って、扉の向こうへ消えた。

俺は一人、屋上に残された。手の中には、もう何もない。さつきまでの締めつけの感触だけが、まだ残っている。

懐の中の瓶。あの男は、それをどうするつもりなのか。

筋の通らないことばかりする、この男の。その筋の通らなさの正体を、俺は必ず暴いてやる。その糸口はきつと、あの懐の中の瓶にも、隠れている。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。